

〈新刊紹介〉

「言語教育学叢書」(第一期・全六卷)

(西尾寅先生・石橋幸太郎先生監修
野地潤家先生・垣田直巳先生・松元寛先生編集)

母国語教育・外国語教育という「言語の教育」にかかわる学理と実践に、関連諸科学を加えた、まったく斬新な共同研究が企画され「言語教育学叢書」として、左のようにその第一期分六巻が刊行された。

- 第一巻「言語教育の本質と目的」
- 第二巻「言語教育の内容と方法」
- 第三巻「言語教育と関連諸科学(1)」
- 第四巻「言語教育と関連諸科学(2)」
- 第五巻「言語教育と関連諸科学(3)」
- 第六巻「言語教育の問題点」

第一巻「言語教育の本質と目的」は三部構成になっている。第一部は、母国語教育の立場から森岡健二氏が、心理学やコミュニケーショソ理論をふまえて、新しい「内語・外語」の角度から、日本語の機構、言語の四領域、教育上の問題などを論じ、母国語教育の改善を「内語」の力を高める方向で、具体的に提言しておられる。一方、外国語教育の立場から芹沢栄氏は、外国語教育の目的から広

く外国の言語観にふれ、言語習得に焦点をあて、「習得」と「適性」、「習得成功の条件」などいろいろな言語学習の問題をとりあげ、中学・高校・大学のそれぞれについて考え、教師・教材の問題にもふれておられる。第二部では、第一部の二論文をふまえて、編集委員の三先生が「共同討議」をしておられる。松元先生の司会で、「言語観」「言語教育観」「言語教育の理念と基盤」「言語教育学の構想」等、歴史的な縦のつながりと、母国語と外国語との関係及び関連諸科学の問題という横のつながりとが意図され、第一部で現実問題に即しながら別々に問題提起されたことを的確・総合的に討議の場にとりあげておられる。さらに第三部では、全体的に総括する形で、監修者、西尾先生の「言語教育学の発見」、石橋先生の「言語教育学の構想」の二論文が、それぞれ「言語教育学」への情熱と期待に満ちた「道標」を示している。

第二巻の構成も三部構成で、第一巻の原則的立場からの問題提起に対し、ここでは教育

を実践する場で具体的諸条件の検討がなされている。第一部は、母国語教育の立場から、倉沢栄吉氏が、「言語生活」や「言語教育の方法」などについてアメリカの文献等、広く引用して、理論に密着した新しい問題を具体的に示し、学習指導内容の試案を出しておられる。外国語教育の立場からは、富田斉氏がご自身の体験を回想風に述べ、学ぶ側から言語教育の内容と方法に関する問題を提起し、さらに教える側からの問題点についても検討を試みている。第二部は、編集三先生の討議で、言語の「教育」という大きな視野から問題がとりあげられている。「母国語の面では『文字言語』から『音声言語』へという重点の移動が教育の場面にもはっきり出て」(115p)おり、それは外国語教育にも共通するとしつつも、母国語教育と外国語教育の異質性からくる問題(例、学習開始期の差など)も考えられている。言語教育の場や教師、教授法の問題、視覚覚教育、評価などの「方法」に關しても討議がなされ、I・Qや言語能力、関連諸科学への「往復運動」など、考えなければならぬ多くの問題が、示唆深く指摘、検討されている。第三部は、西尾、石橋両先生の対談「言語教育学への提言」で、広い視野に立つお二方の「言語教育学」への期待が具体的に語られている。

「私は必ずしも国語教育と外国語教育とを

統一するということを急ぐ必要はないと思ひます(西尾)と、言語教育を学的なものとして樹立させるためには厳しい態度が必要で、じっくり構えて、「統一した理論とか学説をたてることをあまり急いじやいけない」と語られるなど、傾聴させられる点が多い。

第三卷から第五卷までは、第一、二巻の原論的、概論的問題提起をうけて、言語教育のあり方に関して、それに関連する諸科学二五分野から発言がなされている。

第三卷では「言語」にかかわる領域として言語プロパーの立場から「比較語学」(榎垣実)、「国語学」(佐藤喜代治)、「英語学」(榎井迪夫)、「文体論」(東田千秋)が、医学・生理学との関連から「大脳生理学」(時実利彦)、「言語医学」(平井昌夫)が、教育にかかわる領域として「学習心理学」(三好稔・広畑亘)、「教育社会学」(新堀通也)の諸科学から言語教育の問題点に照明があてられている。

第四卷では「言語」にかかわるものとして「意味論」(石橋幸太郎)、「一般音声学」(鳥居次好)、「国際補助語」(三宅史平)、心理学との関連で「言語心理学」(村石昭三)、「文章心理学」(安本美典)、総合的に「人間コミュニケーションの科学」(田中靖政)、また教育にかかわる領域として「教育方法学」(杉山明男)、「視聴覚教育」(村

田碩男)、「言語政策」(塩田紀和)など九つの関連分野から、言語教育のあり方に対して新たな視点が提供されている。

第五卷では、言語プロパーの立場に立つ「言語学」(泉井久之助)、「言語哲学」(山元一郎)をはじめとして「論理学」(沢田允茂)、「文学研究」(大和資雄)、「言語人類学」(国弘正雄)、最近特に重要視されてきた領域の「同時通訳」(斉藤美津子)、「機械翻訳」(和田弘)がとりあげられ、最後に「教育」を軸とした「比較教育学」(益井重夫)という八分野から、それぞれの専門領域における現在の到達点をふまえながら、言語教育の問題が考察されている。

右の二五分野が関連諸科学としてとりあげられているが、これらは、それぞれに「言語教育」に対して多様な関係はもつものの、それぞれの専門分野を担当しつつ同時にあいつつそれぞれの役割を受け持ち、お互いに密接にかかわりあう面をもつという「相互間に縦横の網目をなし複雑な関連を持ちつつ、全体として『言語教育』を支える重層的構造体」をなすと考えられ、終局的には「言語教育学」体系へと総合することがねらわれている。

第六卷は、本叢書第一期の問題提起の締めくくりとして意図され、アンケート中心の三部構成をとっている。第一部「言語と教育」は、「一般有識者の意見」として、荻原井泉

水、畑秀彦、中島健蔵、佐古純一郎、石黒修、家喜富士雄、池田弥三郎、田中宝一、小川芳男、坂西志保、荒正人、倉石武四郎、藤原与一、扇谷正造、大岡信、林禪、椛鳩十、羽仁進、藤宗寛治、立川澄人、関根弘、いいたももという、いずれも学問・芸術・文化・ジャーナリズム・実業界など、国語生活、言語生活のあらゆる領域で活躍しておられる方々が、

言語教育に対して貴重な示唆を与えておられる。第二部「言語教育の現状と問題点」では「関係各界代表者の意見」として、望月久貴、増淵恒吉、大久保忠利、鈴木忍、阪本一郎、八木橋雄次郎、西原慶一、渋谷宗光、朱牟田夏雄、清水貞助、実戸良平という「言語教育の現状」に詳しい方々が、大局的見地から、実践の場に貴重な問題点の指摘をしておられる。第三部「教育実践の場における言語教育の現状と問題点」では、教育実践の場におられる約四二〇名の教師の方々が意見を寄せ、それを「国民教育」「母国語教育」「外国語教育」に分け、編集委員の三先生が分担、集約しておられる。

以上のような、全く新しく、ユニークな叢書で、参考文献八百余をはじめ「言語教育百科事典」の性格もあって、言語教育にたずさわるわれわれにとって、よりどころ、支えになる好叢書である。

(A5判、全六巻、平均二八〇ペ、各巻六八〇円、文化評論社) (白石寿文)